

「落ち穂拾い記」

(46)

『開通褒斜道刻石』

『開通褒斜道刻石』の魅力は、多種の摩崖刻石の中にはじめて傑出している。刻された文字の章法も他とは異なり、伸びやかで奔放である。摩崖の石質が、先の

『楊淮表紀』や『石門頌』等と異なり、石面の雲母状の層が手拓により剥がれ落ち、一部の文字が次第に破損し見えなくなつたようである。何時の頃か、この不鮮明な文字部分が改刻された。改刻により6行目の「鹿」字は、図版①のように全く字画の上部が異なつた。市中に多く見られる拓本は、こうした改刻後の拓本である。改

刻前の旧拓本は得難く、中村不折の書道博物館所蔵本が最旧拓本とされ、戦前の泰東書道院の『書道』誌に、また戦後の二玄社の書蹟名品叢刊に轉録されている(図版②)。呉昌碩の跋文の付された善本である。今から40年ほど前に、「不手非止」なるグループが、同人誌の第7号に別冊『国初精拓開通褒斜道刻石』を付して刊行した。前評判を耳にし購入した。確かに改刻前の旧拓であるが、「国初精拓(清朝初期の精拓)」とは言い難いものであった。底本に用いられたのは、松井如流先生所蔵の剪装本であった。付録には、改刻後の整拓本が付されてあつた。この頃、古書店巡りの友人の中に、やや年配の金石拓本好きの美術教師の閔氏がいた。閔氏が、「開通褒斜道刻石」の旧拓本を所蔵していたが、長く「不手非止」のメンバーである方に貸していたことを以前から聞いていた。しばらくして返却された

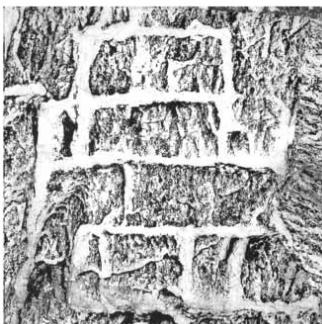
『開通褒斜道刻石』の旧拓本が、閔氏から小生に託された。清朝中期頃の美事な淡精拓であった(右頁主図版)。「不手非止」同人誌別冊『国初精拓開通褒斜道刻石』より拓調、旧さ共に格段に優れた拓であった(図版③)。伊藤滋(書斎名・木鶴室)

図版①

改刻後



改刻前



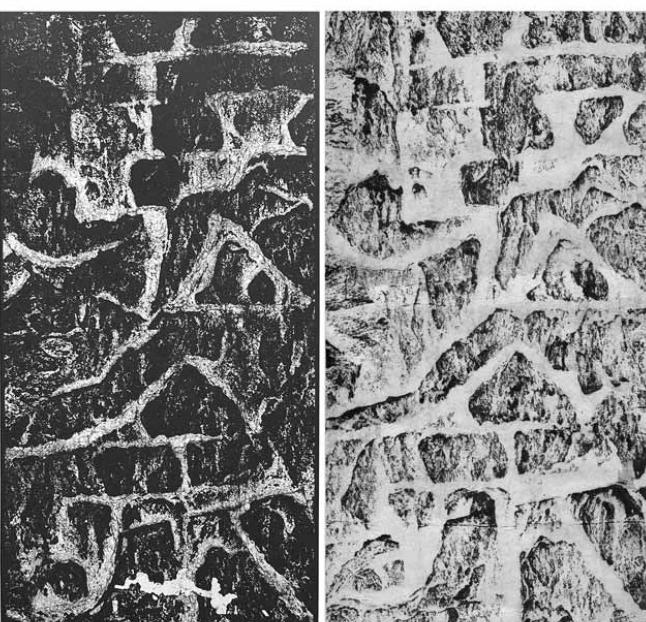
図版②
泰東書道院『書道』誌



図版③

「不手非止」別冊本

閔氏本



書道芸術院 令和の群像 (2023)



大 沼 樵 峰

「書が芸術であるために」

「令和の群像」の原稿を書くにあたり、はたと困ってしまった。子どもの頃から書

道をやっていたわけでも、何かの作品に感動して書を始めたわけでもない。ただ、3人の素晴らしい師匠の元で、楽しく書を続けられたことの縁に感謝あるのみ。

大塚迫峰先生は、書のイロハを、漢字かなだけでなく、現代詩文書や篆刻刻字まで

教えてくださった。千田得所先生には、毎日書道展や書道芸術院展などの作品出品のきっかけをいたしました。後藤大峰先生には、作品作りの何たるかを教えて

いたいた。先生はどちらが準備してお聞きすると何でも的確に答えてくださる。その繰り返しが、今の私の書のスタイルを作ってきたと思う。

大峰先生の聲咳に接する

ようになつた頃から本業である小学校勤務とのバランス(特に時間の使い方)に悩むようになつた。結論としては、自分の性格的なこともあり、管理職に就くこ



とはやめて、生涯学級担任をすることにした。そのため職場にいる時以外は、自由に時間を使うことができた。

閑話休題。

書道をやっていると、いろいろと揮毫を

頼まれることがありますよね。私は教員だったので、書初めの講習会や篆刻の講座の講師を依頼されることもあった。その時の謝礼は驚くほど安いと私は感じている。仕事上の依頼でやむを得ない面もあるが、この状況でいいのだろうかといつも感じていた。

これは二つの面があると思う。一つは、書をしない人は、書道家を芸術家とは見ず、単に字の上手な人と見なしていること。もう一つは、書道家が、書を学ぶために投資してきた物に見合った揮毫料や刻料、作品の代金を要求してこなかつたこと。この二つに起因すると思う。

書道家は人に請われて作品を譲るべきで、作品を売るなんて、やってはいけないという考えが多いと感じるが、それで良いのだろうか。それで書が芸術と言えるのだろうか。京都大学の桑原武夫が主張したような、第二藝術の位置に書がなっていないか、心配でならない。私の考えに反論はあると思う。それらの考え方をぶつける話し合いの場がほとんどないことも気になる。

最終的には、書作品を賣ることが、書が真の芸術であるための必要条件と思料するが、皆様の考えは如何か?

書のひろば

理事長 下谷洋子

第74回連合会書道展 笠嶋忠幸先生記念講演会開催

9月5日、東京都美術館講堂において、出光美術館・上席学芸員笠嶋忠幸先生による講演会が開催されました。

○現代における「書」の位置と制作課題
○古典表現からの展開を考える
○美意識の中からの「雅」とは

造形表現に「正解」はない
どう書くか！

臨書から作品制作へと展開する時の
「ヒント」とは？
古典表現の「匂い」・作品の好感度
素材の二面性

造形的素材感
文学的素材感

読めても、読めなくとも世界へ
等々
2時間余りでしたが、部門に限らず
書にたずさわる人にとって、常に迷い
問題になるいくつかの事柄を、解りやすく丁寧にお話していただきました。
意識の「衣替え」、自分の中の「禁じ手」
を解放すること……印象に残りました。

公益社団法人全日本書道連盟理事
会開催

9月14日(木)上野精養軒にて全日本

書道連盟の理事会が開催されました。
〔議事〕
1 書写・書道教育推進協議会の活動
状況について

2 日本書道ユネスコ登録推進協議会
の活動状況について

3 令和5年度夏期書道大学講座の報
告

4 役員構成機関(理事の役割分担)に
ついて

5 令和5年度書道講演会について(例
年11月開催)

6 令和5年度助け合い募金について
(11月～12月)

7 助成申請について

8 その他

第24回書道芸術院九州支局展開催

九州支局が9月5日から18日まで、
支局展をコスマイト行橋にて開催しま
した。

九州支局は、書道芸術院の大分・行
橋・博多市在住の会員・準会員によ
て構成され、今回は60余人の出品者で
した。主に漢字・現代詩文書が中心で
すが、かなに挑戦した方も何人かいま
した。コロナ禍のため久しぶりの開催
でしたが、前理事長辻元大雲先生始め
したが、現執行委員の作品も陳列されま
した。

会期中、初心者向けかなの講習会
（下谷担当）が開かれ50人ほどが集まり
ました。九州支局は会員数は少ないで
すが、名譽会員の牧泰濤先生を筆頭に



九州支局展会場風景

第74回毎日書道展東北仙台展開催

宮城・岩手・青森の各県によって構
成される東北仙台展が、9月15日～20
日せんらいメディアテークにて開催さ
れました。15日の開幕には担当理事の
柳碧蘚先生が、16日の顕彰式には永守
蒼穹先生が、解説会や揮毫を披露して
賑わいました。この東北仙台展には本
院の役員も運営に多数関わり、出品者
も大勢、地方の顕彰式は本展の表彰式
とはひと味異なるため、受賞者にと
っては嬉しい行事となっていました。

問い合わせ先 はまゆう山荘
○一七(三七八)二二三三三
まで開催。

前向きな先生方が多く、これからも積極的な企画で、書道芸術院の書の一翼になつて頂きたいと思いました。

恒例の本誌の秋の昇段級試験の審査
が9月27～29日に行われました。

今回、かな条幅三種の受験内容が
変わり、臨書が拡大臨書から関戸本古
今集の原寸臨書になりました。しばらく
の間、拡大臨書が続きましたが、かな
な条幅を受ける方にも古筆という基本
的学書の力をつけていただくためです。

三種は他に漢字半紙、ペン字でした
が、師範を目指しての三種はなかなか
ハードルが高く、普段からの勉強が必
須です。細かい報告は来月号になります
が、残念な結果の方は、1年をかけ
てまた丁寧な学書を取り組みましょう。

真下京子 はまゆう山荘展パートII

森と清流に囲まれた群馬高崎の奥座敷といわれるはまゆう山荘で、8月1日より、本院参与の真下京子先生が「はまゆう山荘展」パートIIを開催します。はまゆう山荘は昭和63年に第29回建築業協会賞を受賞した、北欧のお城を思わせる重厚な建物です。大自然の森と建築に同化するように、真下先生の大小の作品(前衛書の他、俳句・詩・心に残る言葉・大字書など)が、ロビーや客室入り口に30数点展示されていますので紹介します。令和6年7月31日まで開催。

問い合わせ先 はまゆう山荘
○一七(三七八)二二三三三
まで開催。

書道芸術院秋の昇段級試験実施

書道芸術院秋の昇段級試験の審査
が9月27～29日に行われました。

恒例の本誌の秋の昇段級試験の審査
が9月27～29日に行われました。

現代詩文書基礎基本講座(41)

小竹石雲

古典から現代詩文書への発展

③伊都内親王願文風のひらがなの表現方法



④伊都内親王願文風の現代詩文書



釈文：榛名笑ひ 赤城泣き 妙義
怒る哉 正岡子規

- ・謹厳端正に書くべき「願文」が行草体で自由闊達に書かれている。
- ・行間も比較的広くとられ、字間も各々の存在をしつかり持たせた所に気高さを感じ、敢えて少し淡墨で無理な力を排して書いた。
- ・大小の変化も一線を越えない程度に変化をつけ、焦点を左前方に置いて跪いた字形は、あたかも仏に帰依しているごとき感もある。これは羲之の書にもあるので、そのことを意識して書いた。
- ・内蔵する人間性の表出を促すようになればとの思いから、上州三山の表情を詠んだ子規の句で心情表現を行ってみた。願文の持つ崇高さとはほど遠いものになったが、人間の感情表現を「山」という自然にぶつけてみたかった。
- ・墨量にあまり変化はつけず淡々と書き込み、文字も前字を受けて自然に書けたらとの思いで、空間での筆の動きの自在性に重きを置いた。
- ・日頃から古典の持つ偉大な力を忍ばせた作を造りたいとの思いは強いため、思い通りにはいかず自己満足で終わってしまった。この積み重ねこそが大切だと信じつつ……。

前衛書基礎基本講座(17)

千葉蒼玄

2文字での構成を考えてみる。「般若」(仏教用語で「知恵」)

①上下縦長



②扁平にし空間を空ける



③三角構成



③の構成で線に変化をつける



一体化



黒を強調



黒く

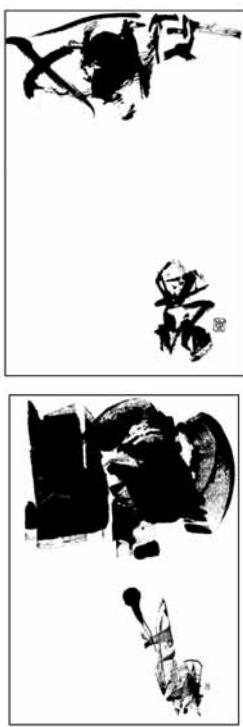


白を強調



白を強調

上下を分離した構成で、白が多い作品と、黒が多い作品の2種を作成した。



題名は白が多い作品は「般若」、黒が多い作品は「HANNYA」とした。

令和5年度第56回 単位認定講習会(右手)

会場＝盛岡市つなぎ温泉「紫苑」

会期＝令和5年8月19日(土)・20日(日)

主管＝北日本支局(支局長 坂本素雪)

久々の北日本支局開催である。コロナ感染症拡大のため、何度も中止となり、待ちに待った講習会である。当初100名の予定受講者数は広報前より参加申し込みの連絡が入り、最終的には128名とした。開催地は北日本支局の南側にある岩手県盛岡市つなぎ温泉である。盛岡駅からタクシーで20分位の御所湖の畔にあり、前方に岩手山が聳えている風光明媚な場所である。ニューヨークタイムズが選ぶ「今年行くべき世界の旅行先」にイギリスの次に第2位に選ばれている。講習会の目的は「所属以外の内容を、実技を通して学習することにより他部の活動を理解し、資質を高める」とある。北は青森から南は山口まで筆を持つ書友達は皆、奮っていた。「書きたい、観たい、言いたい、聞きたい」。自分の書活動や勉強がこれでいいのか気になり、情報が欲しい。筆を持って他部の実技経験することも大事だが、皆集まって「書」

について話し合いたいのである。私は、今回の講習会にあたり、各講師の先生に「書は楽しく」をテーマに講義をお願いした。それは、近年書道人口が激減し、何とか食い止めなければならぬとの思いからである。ともかく、楽しくなければ皆やめていくのである。目標の達成ができたかはわからないが、ここに講習会の授業内容を紹介して報告とする。

1日目
開会式
下谷洋子理事長 挨拶



【原拓】

講師 種谷萬城先生
助講師 田中扇溪先生

拓本には様々な採り方があるというお話を非常に興味深かったです。私の好きな雁塔教序は、鮮翼拓によって碑の美しさがさらに引き立っているのだろうと感じた。孔子廟堂碑は原碑が早くに失われたと知り、原拓の重要性や価値を認識した。拓本の手法や書道史の専門的な知識を、体系的にわかりやすく講義してくださり、書に対する興味関心が高まり楽しかった。

〈大里香溪〉

【院史】

講師 下谷洋子先生

院史は「院の歴史」と題した理事長下谷洋子先生の講義でした。「芸術の自由」を掲げ書道芸術院が誕生してか



小竹石雲常務理事 開会の言葉

ら今日に至るまでの経緯や、現代の書表現、5部門全てを維持する団体として充実発展していることなど詳細にお話していただきました。院役員の作品解説では役員から直接制作秘話を聞くことが出来、有意義な時間となりました。

〈永井鳳雪〉

【書写】

講 師 広瀬舟雲先生

最初の実技「書写」は、広瀬舟雲先生を講師に、終始「左右」を鉛筆で書く実習を通して、正しく整えて書く事の大しさ、また字を整えて書くためには鉛筆の持ち方も大事。「書写」を指導するにあたり、鉛筆を正しく持ち、筆順に従って丁寧に書く大切さを認識できた講習でした。

〈中村雅臣〉

【篆刻・刻字】

2日目
【現代詩文書】

講 師 後藤大峰先生

助講師 大沼樵峰先生

【漢字】

講 師 名越蒼竹先生

助講師 佐伯哲哉先生

今回は「石膏ボードにて陰刻に挑戦」ということで、各自事前に準備をしてきた書稿をもとに講習が始まりました。刻字は私も含め未経験者が多いようでした。始めは不慣れな手付きで彫ってましたが、講師や助講師の先生方がアドバイスを戴きながら無我夢中で心躍らせて彫り進めました。今回の講習での経験を機会に、刻字や篆刻も勉強していきたいと思います。

〈西山葵龍〉

現代詩文書の講習の中で、文字を書くのではなく、どんなイメージで書きたいのかを大切にし、絵を描くようになっていくという言葉が印象に残りました。ことば選びを大切にし、自分の思いを表現できる、豊かな発想力を身に付けていきたいと感じました。認定講習会に参加し、多くの作品に触れ、刺激を受けて、ますます書が好きになりました。ありがとうございました。

〈阿部 葉〉



【かな】



講 師 下谷洋子先生
助講師 田子白嶺先生

午前最後の「かな」は高野切第一種の拡大臨書でした。下谷先生は説明の中で「かなは形も大事ですが、一番は

今は「穂先の活かし方(吊り筆)」についてご教授いただきました。課題を通して、筆に含ませた墨液は穂先から多く出て、さらに筆圧をかけた後、穂先が立ち上がる瞬間に一層多くの墨が出来ることや始筆・終筆・転折部で力がないなどの理解が深まりました。名越先生の優しく穏やかなお人柄に敬慕し、受講生としてありのまま無心で学ぶことが出来ました。

〈石澤青仙〉

リズム。筆をついて、上げる。つり上げることによって力を入れる所をつかんでほしい。」と説明され、皆さん半折½に1行や2行で、連綿線やつり上げる「し」を一生懸命先生の指導を受けながら書いていました。大きく書く難しさや大切さを感じる時間でした。

〈工藤山房〉



【前衛書】

講 師 千葉蒼玄先生
助講師 千葉紅雪先生



の「動」の場面に圧倒され、あつとう間に時間が過ぎていきました。その中で特に印象に残ったのが「常識を覆す」という言葉。なかなか難しいですが、この言葉を糧に楽しく創作活動をしていきたいと思います。

〈田澤館楓〉



懇親会で「盛岡さんさ踊り」を披露



刻字…大沼助講師による指導



前衛書…千葉講師の席上揮毫



受講生謝辞

「百聞は一見にしかず」という言葉がぴったりの講義でした。P.C.による先達の名作鑑賞の「静」の場面と、蒼玄先生によるダイナミックな席上揮毫

九成宮醴泉銘（唐・歐陽詢）①

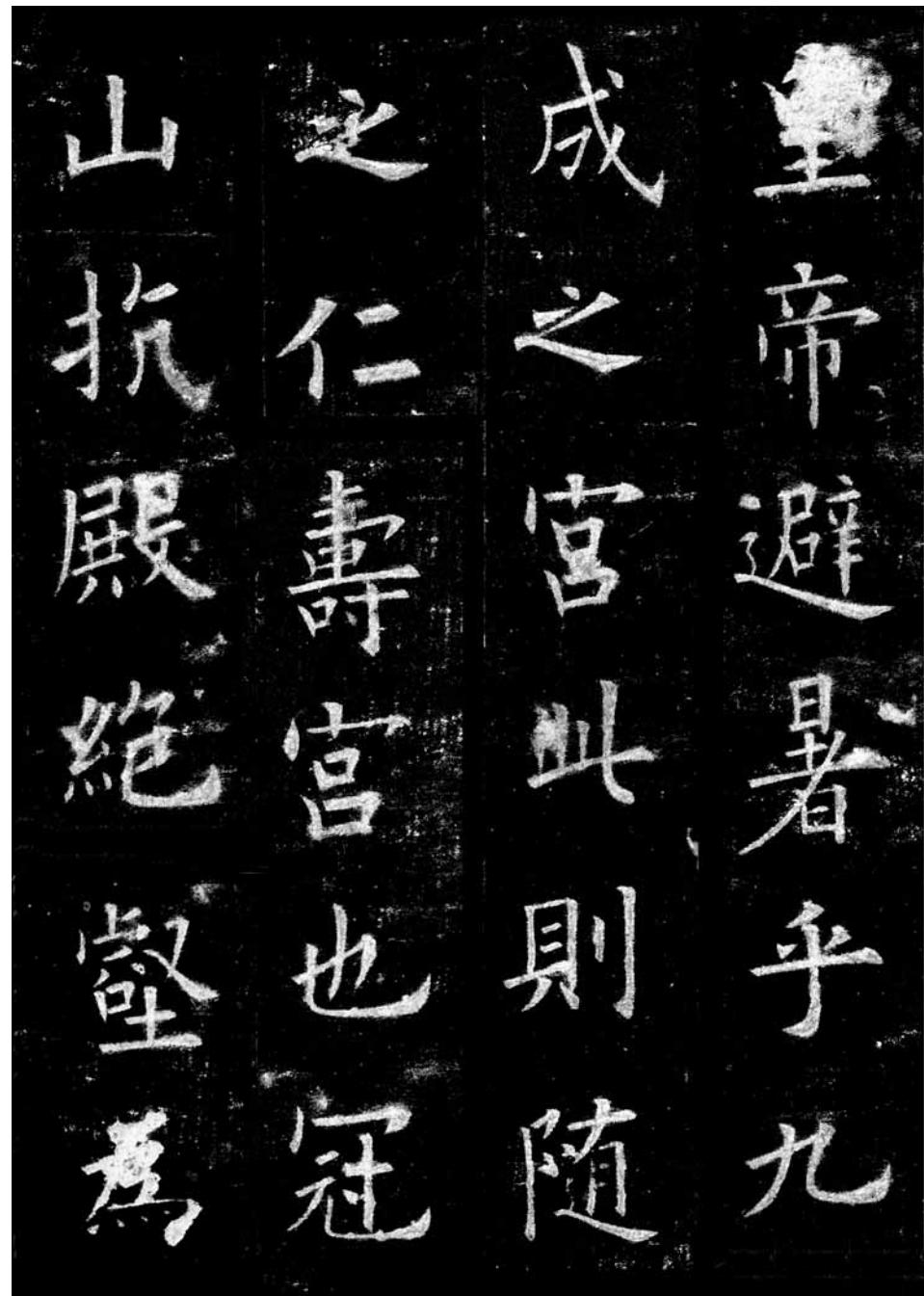
特別研究部臨書課題

II (A. 大作の部 每百巻書き貰・貰サイズ以内 2×6尺・金紙も可) 当該古典の左記掲載

(B. 小品の部 当切以上半切以内金紙以内も可) (A. B. 縦横両面) 部分以外も可。

漢字研究部臨書課題

II (半紙普通判・縦使用) 左記掲載部分より何文字臨書してもよい。



(三井記念美術館蔵)

(掲載図版・80%に縮小)

〈解説〉

唐の太宗は、隋の文帝が造當した仁壽宮を修復し、九成宮と名付け避暑地とした。散步中、湧き水を発見した太宗はこれを吉祥のしるしとして記念碑の建立を命じた。魏徵が撰文し、76歳の歐陽詢が書したが、「楷法の極則」と称される名碑となった。貞觀6年(632)の刻で、原石は陝西省麟游県に現存する。

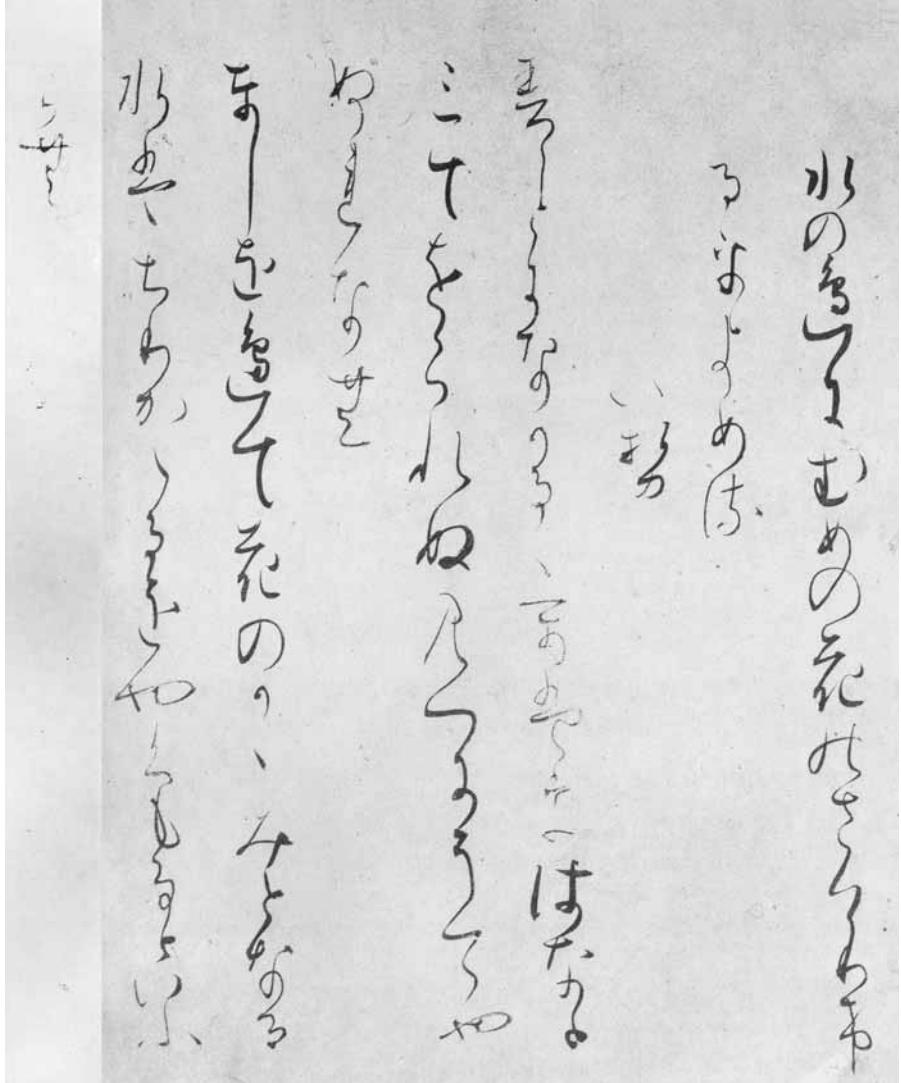
歐陽詢(557~641)、字は信本。はじめは隋に仕えたが、唐の高祖に迎えられ、弘文館で書を講じた。広く学問に通じ、各書体に巧みであったと言われる。

なお、臨書の際に不鮮明な字があった時は、別の箇所を探すと完好なものを見つけられる場合がある。(編集部)

*落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

皇
為
爲

(注) 最終行の「ら」の1画目を補って書いて下さい。



<解説>

古今集の古写本は多數あるが、「関戸本」と称される筆跡は、古今集1100首のうち16ほどが残る。下谷東雲先生の調査では220首となっている(本誌320号の書話シリーズによる)。断簡の他に零本が加賀の前田家から名古屋の関戸家に伝わり、これが名称の由来である。

零本は緑・紫・茶色(それぞれ濃淡あり)の紙が用いられた冊子本であり、ページをめくるごとに、濃色から淡色、淡色から濃色という色変わりが美しい。

零本末尾に中院通村の識語があり、藤原行成の真跡としているが、實際には行成より後の11世紀後半の書と推定される。

<よみ>

水の邊にむめの花のさけりけ
春ごとにながらかははなど
みてをられぬみづにそでや
としをへて花のかざみとなる
水はぢりかゝるをやくあるといふ

東ぬれなむ連利無らむ
いせ勢可見ははなど
開盤乎にそでや
みづにそでや
みづにそでや

*掲載図版・70%に縮小

*古筆は原寸(以上も可)で臨書し
ましよう。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみ也可)

かな研究部臨書課題

(半紙普通判(料紙可)・縦長に使用)別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。上記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

特別研究部臨書課題

A. 大作の部=毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可
B. 小品の部=半切1/3以上、半切以内(縦横自由)半切1/2以内も可
<いずれも上記の掲載以外も可。>

習い方解説 (一)

小浜大明

竹邊不知暑
(竹辺 暑を知らず)
姚広孝

竹の茂るあたりでは暑さを感じない。

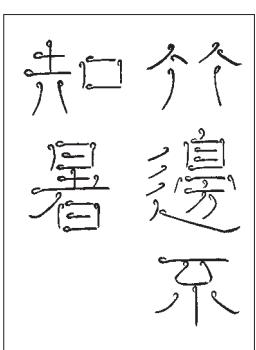
介 遍 京

赤口 喜 署

太ゆえ



書体=自由



〈骨書き〉

過日、古典の臨書で隸書の審査をした際、隸書の用筆を全く理解せずに、楷書の筆法で書かれていた方が二割強おられたことに驚きました。したがって今回約6ヶ月は隸書を多用して書かせていただきました。

竹の茂るあたりでは暑さを感じ

竹邊不知暑

よみ(竹辺)暑を知らず

西川翠嵐

歸馬放牛
(武成「書經」)

戦争が終わって平和が訪れるこ
と。

今月から6回にわたって漢字規
定の担当をさせて頂くこととなり
ました。どうぞよろしくお願い致
します。

さて、楷書三年とか十年などと
いう話を耳にされた事はおありで
しょうか。それほどに楷書はむず
かしく、かつあらゆる書体の學習
の基礎を培うことができるという
話です。

半紙作品の審査などを担当させ
て頂いておりますと、起筆や転折
左右のはらいなど本当に見事な作
品に出会い見とれてしまうことも
めずらしくはありません。反対に
どうしてこうもぞんざいなと思わ
れる線も……。

まずは、一字一字の輪郭を知り、
左右の釣り合い、文字の中心、分
間の広狭、画の長短、太細など
ひとつひとつ觀察してから書いて
みて下さい。

歸馬放牛　よみ(帰馬放牛)

書体=楷書



かな規定 初段以上【十一月十五日締めきり】用紙 半紙普通判（料紙可）松村くに子選書

習い方解説 (一)

松村くに子

村雨の露もまだひぬ真木の葉に
霧たちのぼる秋の夕暮

（寂蓮「新古今和歌集」）

「村雨が通り過ぎ、露もまだ乾かない真木（杉や桧などの常緑樹）の葉から、うっすらと霧が立ち昇っている秋の夕暮よ」の意。

夕立の後、木立から立ち昇るものの幻想的な雰囲気が伝わり、情趣豊かな世界観が漂っています。百人一首の歌としても知られている名歌です。

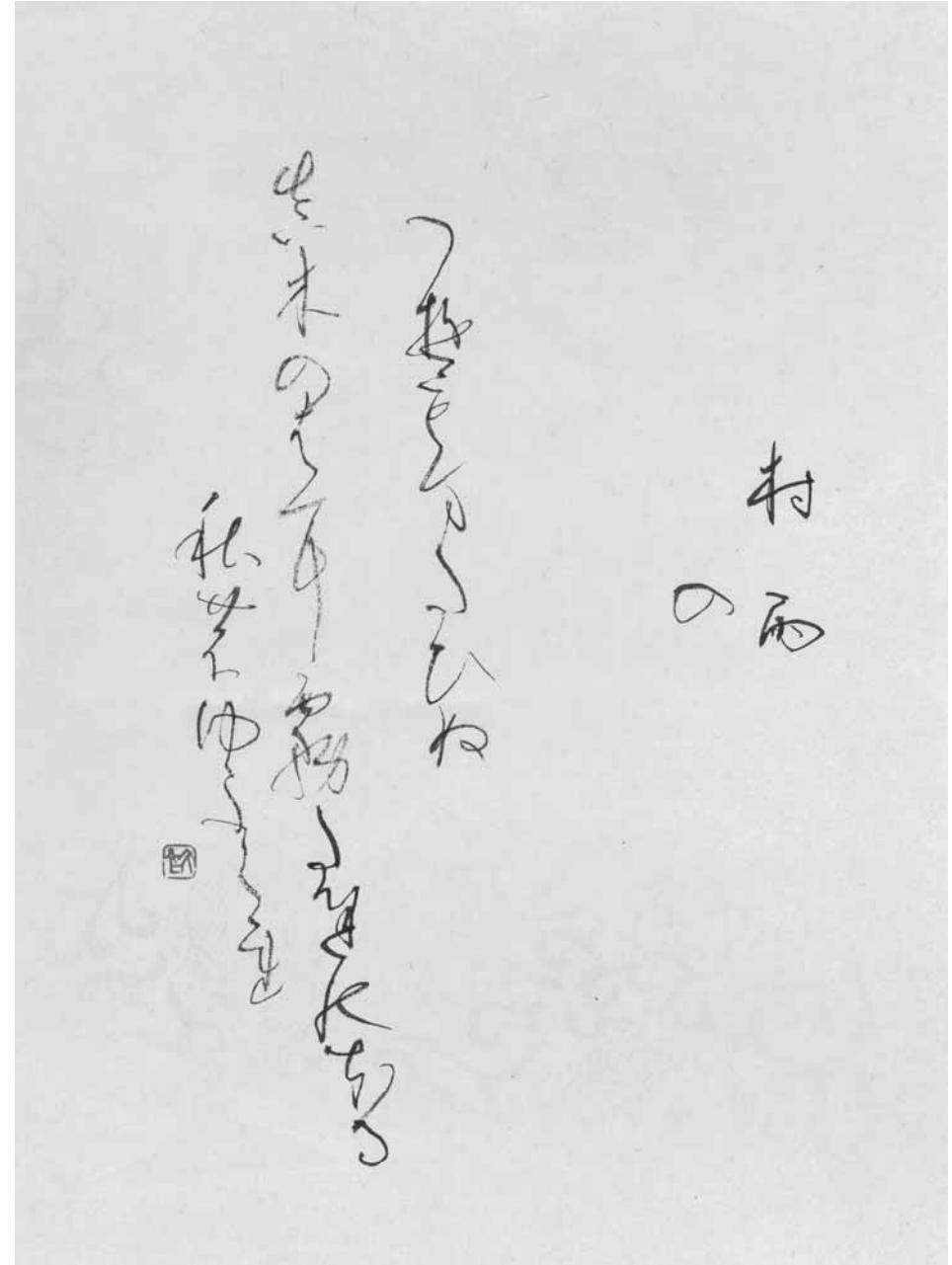
かな作品の創作は、なかなかむずかしいです。課題のひとつに連綿の表現がありますが、4行目のような長い行の時に連綿を続け過ぎると、平板な表情になります。また、無理な連綿（□□⋮上の字の右下から下の字の左上に続けること）は、うるさくなります。歌意のような情緒豊かな流れを演出したいです。古筆の連綿箇所を良く観察してその妙を勉強してください。

よみ方 村雨の露（つ遊）も（毛）ま（万）だ（多）ひぬ真木の葉（者）に（耳）

霧た（多）ち（運）の（能）ば（本）る秋の（農）夕（ゆふ）暮（久連）

創作

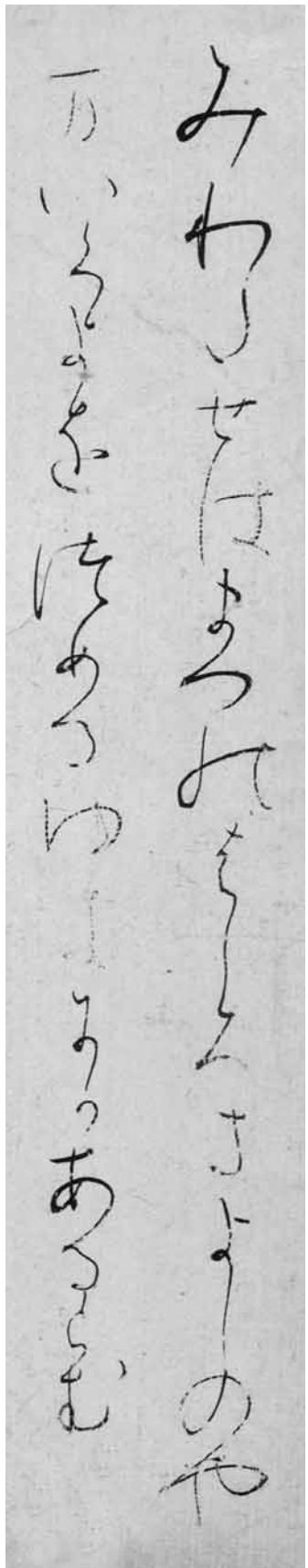
*料紙は半紙版(33.0×24.5cm)を使
用しましょう。



かな規定 秀級以下【十一月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ （料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を臨書する。または部分（2字以上の連綿または単体を含む）を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
(掲載写真拡大120%)



よみ方

みわた(多)せばまつ(の能)は(者)しるき(支)よしのや
ま(万)いく(久)よをつ(徒)めるゆき(支)に(尔)か((可))あるらむ

習い方解説

（）

佐 藤 希 雲

佐藤希雲選書

朝に日に色づく山の白雲の
思ひ過ぐべき君にあらなくに
(厚見王「万葉集」)



「日ごとに秋が深まっていく山にかかる白い雲がやがて消えるよう、私はあなたをいいかげんに思っているわけではありませんよ。」の意。相聞の歌です。

3行でまとめてみました。2行

日の配置に留意し、3行目は右に傾けます。墨絶ぎは「す」でも、「君」でもよいと思います。

よみ方 朝(あさ)だ(日)(介)に(尔)色づく(久)山(や万)の(能)白(しら)雲の
思(於も)ひ(日)過(す)ぐ(久)べき(支)君にあらな(那)く(久)に(1)

*タテ形式に限る

創作

漢字条幅規定 初段以上 [十一月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

名越蒼竹選書

習い方解説 (一)

名 越 蒼 竹



玉帛徵賢楚客稀 猿啼相送武陵歸
(逢友人之上都「僧法振詩」)
(玉帛を徴して楚客稀なり。猿啼き相送る武陵より帰るを。)

書体=自由



漢字条幅規定 秀級以下 [十一月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

飯沼 惠鳳選書

習い方解説 (一)

名 越 蒼 竹

私は臨書力と創作力には強い関連性があると思っています。しかし臨書すればすぐに創作できるわけではありません。見えたままを書き写す態度ではなく、用筆・運筆と字の結体の特徴や全体の章法を掴んで、その書風を生む原理を発見する姿勢が大切です。倣書に慣れて創作の幅を広げることができれば幸いです。初回はまず王鐸から。

私は線にこだわり、羊毛長峰、濃墨を使用、用筆法を最重要視し多彩な線を追求しています。

今月は「善氣迎人」。「善い気持ちで人を迎える」です。使用した筆は15mm×90mmの筆です。重厚な線で温雅さを表現出来るよう心掛けて制作してみました。

善氣迎人
(善氣人を迎う)

書体=自由

倉林紅瑠

唄を忘れた金糸雀は
象牙の船に銀の櫂
月夜の海に浮べれば
忘れた唄をおもいだす
西條八十「かなりや」 紅瑠書

書体=自由

B.S.朝日で「子供たちに残したい美しい日本のうた」が放送されています。大切に歌い継がれてきた童謡・唱歌などを紹介し、その「うた」の魅力を伝えてています。

「かなりや」は西條八十作詞・成田為三作曲によるもので、原詩は1918年発行の童謡雑誌「赤い鳥」11月号に掲載されました。当時の西條八十自らの境遇と歌を忘れたカナリヤの思いとを重ねあわせたもので、そのことを理解すると、童謡の世界は広がります。

漢字とかな交じりの歌詞は、かなは漢字より少し小さめに、漢字はかなは調和するようにやわらかく書きましょう。次号から「平がな」の基本について解説していきます。

唄を忘れた	金糸雀は
象牙の船に	銀の櫂
月夜の海に	浮べれば
忘れた唄を	おもいだす
西條八十「かなりや」	○○書

□注意!!

用紙の大きさにばらつきが見られます。
用紙サイズ(ハガキ大14.8×10cm)を守って下さい。

△用紙 ハガキ大(14.8×10cm)の白紙を使用
△黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)

文化祭 運動会 御車代 歓送迎

文化祭 運動会 御車代 歓送迎

式次第 招待券 記録係 講演者

式次第 招待券 記録係 講演者

西川 翠嵐

今月の

ホープ作品
各部総評

No. 748

半窗殘月靈華亭一
片壁風蓮草香

前衛書部 特選 輪川友香里

長鋒の開閉を上手に使った切れ味の良い線。緊張感ある構成で、余白も美しい秀作。

◎前衛書部総評 雅印の大きさ、落款の位置にもご留意下さい。

(白硫評)



現代詩文書部 特選 岩上 郁子

淡墨表現の意欲作。青墨で濃淡を工夫し、平がなは爽やかに伸びる。山水画を見るが如きである。

◎現代詩文書部総評 墨と紙があり和す表現を望みたい。筆墨紙の特徴を把握しよう。(岳峰評)



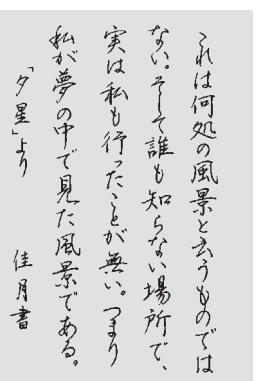
漢字部 師範 森 適
西周金文に拠る創作。字形は安定し、線は筆法巧妙で收筆の表情が多彩で生命感が創出され上質。月創作する熱意に敬意。幅広く、上質な創作を期待する。(萬城評)



ペン字部 師範 高木 佳月

丁寧な筆致と構成で、紙面のバランスも良く、行間の余白がきれいで魅力的な作となりました。

◎ペン字部総評 紙面構成で上下左右、行間を適切にすることによりきれいな作となります。字間行間のバランスに注意を。(豪峰評)



かな条幅部 準師範 山中 清玉
墨が少々薄いが、手本を理解してかなの流れを静かに引き出す。

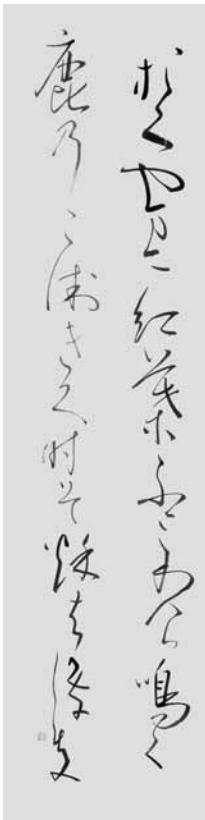
◎かな条幅部総評 誤字は少なかつたが、字の大小・潤滑に配慮が欠ける作品が多い。条幅の線の太細は写真版で学びたい。(洋子評)



漢字条幅部 師範 新村 翠芳
沈潜し、骨力と運腕の大きい漢碑の特徴を捉えた隸書作。気力の充実と紙面のまとめ方抜群。

◎漢字条幅部総評 各体に挑戦した意欲的作品も目につき喜ばしいことではあるが誤字や全体の調和に欠ける作が散見した。(石雲評)

かな部 師範 鈴木 英晴
連綿を多用した行の流れが美しい。卓逸した独特のしなやかなりズムで、骨氣あるかなの書きを紡ぐ。◎かな部総評 全体に文字や動きが小さく貧弱に見える作品が多くた。紙面に対するバランス一考。変体がな農にも注意! (洋子評)



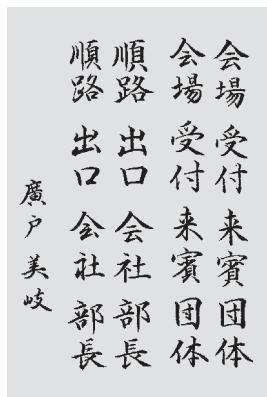
ホープ作品
各部総評

実用書優秀作品

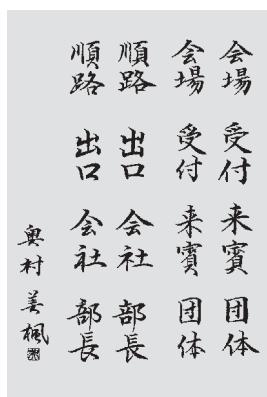
選評 大平邑峰

◎ 実用書部総評

明るくのびやかな書きぶりをを目指したい。2文字の単語としてまとめるために、間のとり方や文字の中の白のバランスに注意したい。（星峰評）



特選 潤 戸 美 岐
参考手本をベースにしながら、書
潤な線で大らかに書き上げた。



特選 奥村美樹
独自のリズムで2文字の呼吸が溶け合い、のびやかな出来映え。

前衛書部(特選)

現代詩文書部(特選)



桃咏治裕蒼
仙艸舟子風
四紫浩美
千草千美
大音代音
洗練されたモダンな作
滲みが拡がり温かい作
大胆な構成で迫力あり
左右の造形が相呼応する
優しく安らぎを覚える作
大胆で、リズム良く横に流れる
味わい深い線で書き通す
構成上手く繊細で爽快
淡墨の潤渴と滲みの妙
大胆な構成で迫力あり
大胆で、リズム良く横に流れる
味わい深い線で書き通す
構成上手く繊細で爽快
大胆で、リズム良く横に流れる
味わい深い線で書き通す

選評 北村白琉

朱惠一
舟一
喜代美
華一
代美
香一
都里
雅
漢字とかなの組合せ絶妙
墨色の研究の結果を發揮
大胆に余白を残す構成佳
あとの美味しさ伝わる
墨量の変化で遠近感創出
筆力が紙背に達する作
墨色美し
豊潤な線で筆良く動く
切れの良い線で構成も佳
筆自在に動き線に粘り
割れる筆を巧みに操る
長鋒の筆の開閉心得た作
樂しみながら書いている
表現に合う筆の動き成功
漢字と仮名がよく調和す
夏の一コマよく伝わる
深い情念を感じる作
リズム良く横に流れる
大胆であり、緻密な構成
軽快で楽しく夢のある作

芳藤祥雄
博連漣
花都里
雅京花
都里
雅
漢字とかなの組合せ絶妙
墨色の研究の結果を發揮
大胆に余白を残す構成佳
あとの美味しさ伝わる
墨量の変化で遠近感創出
筆力が紙背に達する作
墨色美し
豊潤な線で筆良く動く
切れの良い線で構成も佳
筆自在に動き線に粘り
割れる筆を巧みに操る
長鋒の筆の開閉心得た作
樂しみながら書いている
表現に合う筆の動き成功
漢字と仮名がよく調和す
夏の一コマよく伝わる
深い情念を感じる作
リズム良く横に流れる
大胆であり、緻密な構成
軽快で楽しく夢のある作

選評 大平邑峰

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 下谷洋子 小竹石雲 山口仙草 三浦鄭街

現代詩文書 (四枝社)

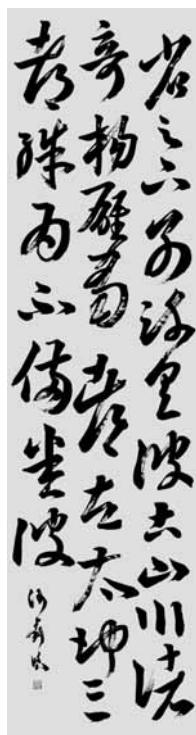
奥川麗流
「藤村の詩」



◆羊毛長鋒を駆使し気迫の籠った作品。1行目は墨量を多くし、2行目は軽快にして調和を図る。(石雲評)

臨書(白珠)

相內沙莉
「十七帖」



◆半折に3行で表現、非常にメリハリの効いた筆致は小氣味良く気持ちが良い。筆映りの良い安定作。（鄭街評）

135×35cm

135×35cm

苗代佳惠書

月日未定之日
行者未定之日

◆凜とした線が明快に流れ嫋爽とする。特に前半2行の動きが冴えて清々しい。筆圧や墨量に一工夫。(洋子評)

136×35cm

部分拡大

臨書 (菊月) 新井惠子 「秋萩帖上」

◆ 大らかに伸びのびと綴る。紙質に対し、ての墨量や細線への対応が巧みであり、貫した流れで輝く。(洋子評)

新井惠子臨

35×137cm

萬物此之無不可也
故其於事無不當也
不苟此才修之和於事

小品の部

〔特選候補者〕
〔漢字〕
〔創作の部〕

**総出品点数
80点**

漢字
— 43 白

篆刻

漢字
4 占

ハンドル

大拙	佐藤	秀水	門脇	信子
宮古	長澤	紅苑		
粹仙	藤井	龍仙		
「篆書」				
「漢字」	紅瑤	栗原	りか	
	宗苑	白井	真理	
	澄春	土屋	恵仙	
	八街	十河	春景	
	華祥	玉渕	良章	
	八街	三浦	小樹	
もく	洞書	安藤	香苗	楊風
琴成	大枝			
たか	浜野			
森田	藤谷			

漢字研究部
(十七帖)

選評 小浜 大明

今月のホープ作品



上利啓子



直千規富理紅
代美
子子芳子扇雨

雅智惠良信翠
泉景美子代玉

恵椎雅惠春美
弦菜悠華月朱

美敦聖奎楊睦
艸子朋心風月

漢字研究部 特選 上利啓子

の中には、墨量不足の作がかなりありました。

遅速、強弱、肥瘦といったメリハリのきいた、変化に富んだ充実した線で表現され、画から画への筆脈も通じた見事な作品です。字形も整い、配字のバランスも良く、明快な臨書です。

◎漢字研究部総評

今回の作品は、入選以上の作品と選外の作品との差が大きいと感じました。選外の作品

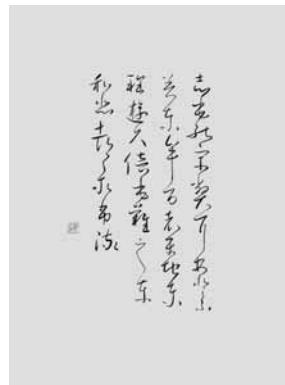
の中には、墨量不足の作がかなりありました。その他、基本的な字形を把握せぬまま書いているものと考えられますが、碑面の傷をそのまま書いた作も少なくありませんでした。特

に4行目の「多」の入筆の誤りを多く見かけました。臨書する前に辞典で調べて書く習慣を身につけていただきたいと考えます。

か な 研 究 部
(秋萩帖)

選評 天海矩子

今月のホープ作品



船津美代子

◎かな研究部総評

素晴らしい観察眼です。滑りやすい料紙ながら筆が立っていて、線が美しく雰囲気をとらえた立派な臨書です。

◎かな研究部総評

かなの臨書は、原寸大するのが理想です。小さすぎる作品が散見され残念でした。墨量には気をつけましょう。過多は品格を失います。

素嘉瑞 嘉和 篦久 寿春洋
子江華 朗子 右子幸 子華子

書上蘭正森紅
湖泉泉鼎華地璣
青書上高た一
八上青紅菊書や大光清華う一清澄日上
生泉蓮瑤月泉ま雲彩月仙る心月春新泉井か心
卷

川片柏市石池藍
崎岡谷川田澤作
帆。サ知
乃照和チ津幸白
佳徳子子白珠
篠荻沼須新七田驚櫻塘菊飯小
宇田原田井五玉山田野地高坂林行橋部田渡織嶋畠
濟田宇飯泉河内
寿春美春洋子
惠美洋奎香惠和哲美龍和恵幹素嘉瑞嘉和簞さ久美子
心舟子美子梢自子水生子江華子朗子右幸子
子子子子子子

一心
性 惠こ玉華幸無や竹玉た八千清高橋雅真月向珠湖天
泉だ川仙扇門ま美川か街露葉井長月白上白薺天
原 A I 蘭鼎拙書高崎大蕙

秋葉作(50) 渡吉吉山山山八森本村松松真星藤廣原昌根西中鈴代清島佐坂小
邊野岡本本中口木田柳上村重下野原瀬澤山岸山澤里木田水田藤本峰
橋美由美三信松東美梅津律紀崎小佳陽豊中幸典曲艺正葵 星曉華紀貴風里加

八あ福も唯 華生文八石幕高澄蓮上も A 澄高書堺上立有清竜紅竹伊富竹素潮高墨竹白上秀こ樹森正権こ清一 〃 澄た和大一

富高扇高蘇玉蒼，春聖碧蒼大竜附華千秀祥。立東白富書
富高扇高蘇玉蒼，春聖碧蒼大竜附華千秀祥。立東白富書
大千華大旭澄大雲書青篆大玄蕙渡高了澄誠和雅
大千華大旭澄大雲書青篆大玄蕙渡高了澄誠和雅
華堦

菅新清佐佐佐佐佐權込黒吳熊國桐木木北北菊菅神河川河金加片加加鐵香小小小荻尾岡岡大梅梅宇入伊井伊板石原宮條水藤藤野木々々久代山柳井峰谷村下村爪地野田原元合子藤山瀬瀬治川野野棕田形村部沢山津井谷与閔又ノ坦田幸木木間眞千登木由佳由田口昌玉三幸育綾德蒼淳和洋雪美竹宏琴溪千壽志美白静典吉茱和美雅惠晴夏俊翠みよる朱礼良紅紀藤淳久代楠悠玉心理春詠青悦子昌子嗣空子嗣子子子華翠葉善子翠風子子子和雅代子子仙敬千若國美修亮澤星子星風露子子子麗花泉麗花扇修子鳳子

かな研究部成績表

予告

2023・11月号(751)の「古典鑑賞」・「古筆鑑賞」の課題

(12月10日締切)

古典鑑賞

④62

九成宮醴泉銘(唐・歐陽詢)
おうようじょく

②



(三井記念美術館蔵)

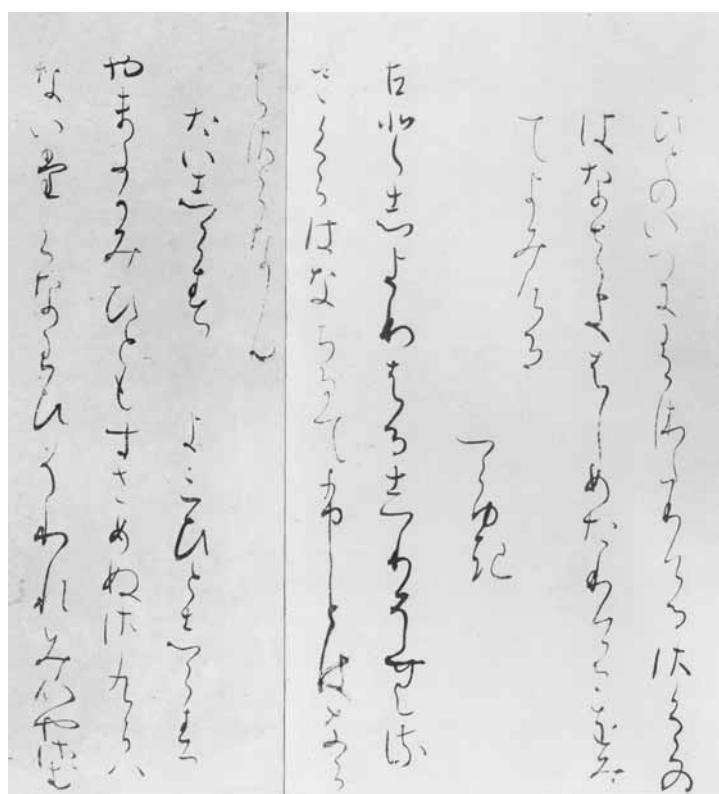
(掲載図版・55%に縮小)

古筆鑑賞

㉓

関戸本古今集
せんとほんこきんしゅう

②



(掲載図版・50%に縮小)

王者刑殺當罪。/賞錫當功。得禮/之宜。則醴泉出/於闕庭。鶻冠子

よみ ひとのいへにうあたりけるさくらの/はなさきはじめたりけるをみ/て よみける/つらぬき/ことしよりはるしりそむる/さくらばなちるてふ ことはなら/はざらなむ/だいしらずよみひとしらず/やまたかみひと もすさめぬさくらば/ないたくなわびそわれみはやさむ

書展

板垣洞仙 傘寿書展

—今昔の書作—

山口仙草

会期＝令和5年8月23日(水)

～27日(日)

会場＝成田市文化芸術センター

板垣洞仙先生傘寿書展の概要について報告いたします。

板垣洞仙傘寿書展—今昔の書作—は、令和5年8月23日から8月27日まで、JR成田駅前のスカイタウンギャラリーで開催された。

作品は、新作の大作「祭鼓」をはじめ、これまでに発表された作品、成田山書道美術館に収められた「銘」、また第35回毎日書道展会員賞の「玄」も展示された。地元での開催であり、高校の教え子から成田の有志の皆さんまで大勢の方が押しかけた。

明るくすっきりした会場には様々な花が飾られ、明るく華やかな雰囲気であった。

現代感覚に溢れた大作から小品まで、淡墨作品と前衛書と現代詩文書による小品が展示され、多くの方が来場され大盛況であった。

板垣先生の前衛書に取り組む姿勢と創造力の豊かさを改めて感じ取ること

ができた個展であった。

8月27日には祝賀会が開催され、成

田市長・小泉一成様、成田山新勝寺貫

首岸田照泰猊下・毎日新聞社からは桐

山正寿様にご挨拶を頂き、賑やかな会

となつた。また、富山・宮城・群馬・

東京からも書友に出席を頂いた。

そして宴もたけなわの頃、これまで

の先生の活躍の様子が映像で紹介され、会場は大いに盛り上がり、楽しい会となつた。

以上、報告といたします。



祝賀会 小泉成田市長あいさつ



会場風景

第58回

竹扇会書展を拝見して

崎井恵風

会期＝令和5年9月16日(土)
～18日(月・祝)

会場＝大阪産業創造館
(3階マーケットプラザ)

残暑厳しい日々が続く中、展示会場に足を入れると、小扇先生が、にこやかな笑顔でお出迎えくださいました。まずは目に飛び込んできましたのは、竹村先生の遺作「坐」。会場全体が見渡せる舞台中央に、二曲屏風に設えられていました。会員の皆様を静かに見守っておられるかのように。暫し引き込まれる様に対峙させていただきました。次に推薦作家2名の大作です。10メートルの壁面を圧する迫力に、今後益々の活躍が期待されます。

小扇先生はじめ出品者の作品意図等のコメントが、額写真付きで丁寧に展示されています。毎年ながら作者とより深く気持ちがつながります。竹村先生生き後の竹扇会の皆様の結束力は小



会場風景



竹村先生の遺作「坐」を囲んで

扇先生を中心により高くなられたと感じます。会場出入口近くには、篆刻作品も展示されています。これも長年継続されておられ、敬服いたします。吹き出していた汗も收まり、清々しい気持ちで会場を辞しました。

●篆刻

【十一月十五日締めきり】

〈出品規定〉

①摹刻	(ア)課題による語句
②創作	(イ)原印自由 (出品の際、原印のコピー添付)
語句自由	

- 印面の大きさは2.3cm(八分角)以内とし朱文、白文自由。
○印箋は市販のもの、半紙横½の大さに切ったものも可。
○創作、摹刻とも応募は一人一点。

10月号 摹刻課題



○出品方法

用紙の右側に押印し、左側に印影の糸文を明記、並びに落款(氏号)を入れる。

昭和五十年一月二十七日第三種郵便物認可
令和五年九月二十五日印 刷 行

(毎月一回一日発行)

書道芸術

第七五〇号

748号篆刻優秀作品

選評 後藤大峰

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は
〒101-0031 東京都千代田区
東神田一ー一六一七
東神田プラザビル三階

公益財団法人書道芸術院

電話(03)386-11-954
FAX(03)386-21-1954

ご連絡等は
月曜日～金曜日 10時～16時
の間に
お願ひいたします。(土日・祝日は休む)



創作特選 西川翠嵐



一線、一線
の運刀の良さ
が、この作品
の素晴らしい
のひとつの要
素。

摹刻特選 横井恵華



微妙な線の
変化が、とても
も良い。印面
いっぱいに、ご
自身を表現し
た。

創作特選 西川翠嵐

今月の注目作



藤井龍仙

木の 櫻井 恵華	墨宣 西川 翠嵐
秀作(60音順) 芳琴新栄 大雲蒼原 大雲加藤 大雲鷺山 大雲美梢 大雲喜喜 大雲万喜 大雲寺幸喜	秀作(60音順) 伊藤作祥 伊藤作祥 伊藤作祥 伊藤作祥 伊藤作祥 伊藤作祥 伊藤作祥 伊藤作祥
木の 櫻井 恵華	墨宣 西川 翠嵐
佳作(50音順) 幕張阿部 幕張青沙 幕張青沙 幕張青沙 幕張青沙 幕張青沙 幕張青沙 幕張青沙	佳作(50音順) 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一
佳作(50音順) 丸山香書 丸山香書 高岡成田 高岡成田 高岡成田 高岡成田 高岡成田 高岡成田	佳作(50音順) 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一
入選(50音順) 大雲加藤 大雲須賀 大雲澤 大雲一起 (選外なし)	入選(50音順) 大雲遊雲 大雲荒水 大雲石心 大雲赤星 大雲中島 大雲義則
入選(50音順) 大雲生大 大雲逢沢 (選外なし)	入選(50音順) 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一 大雲唯一

送
料

一か月の購読部数が

1部	79円
2部	95円
3部	103円
4部	119円
5部	135円
6部	151円
7部	167円
8部	183円
9部	199円

10部以上は
送料免除

令和五年九月二十五日印刷
令和五年十月一日発行

定価 一部 七五〇円

編集兼 下 谷 洋 子

発行人 印刷データ処理 小沢写真印刷株式会社

発行所 株式会社リンクス
小沢写真印刷株式会社

公益財団法人書道芸術院

東京都千代田区東神田一ー六七
電話(03)386-21-1954
FAX(03)386-21-1957
振替 00150-4-135058
ホームページ
<http://www.linos.jp/shogei/>